



赤木智弘

SPECIAL TALK

雨宮処凛

司会・構成：細野秀太郎／撮影：常見藤代
於：早稲田「あかね」

不利益分配の平等性

——赤木さんのことは『論座』〇七年一月号（「丸山眞男」をひっぱたきたい―三歳、フリーター。希望は、戦争。）で知りました。それで、そのとき企画していたPARC自由学校の講座（註1）で直感的に雨宮さんと赤木さんの対談を組みこんだのですが、ちょうどこないだ雨宮さんから「いま赤木さんがブルム」と聞いたので、さっそく対談をお願いすることにしました。はじめに、謎の人（？）赤木さんから自己紹介をお願いします。

赤木 生まれ育ちは栃木県です。高校を出たあと、東京のIT関係の専門学校に通って、そのあと二人暮らしをしながら何年か非正規雇用で働いていましたが、数年前に実家に戻りました。いまは深夜にコンビニでバイトしています。

——お一人とも七五年生まれですよ。

雨宮 七五年生まれつて悲惨なめぐり合わせなんです。受験戦争は激烈で、ちょうど社会に出ようとしてた頃にバブル崩壊の影響が吹き出して就職は超氷河期。赤木さんの文章、読んでいてとても共感できました。

——『論座』四月号で名だたる方々（註2）が赤木さんへの応答文を寄せていますが、概ね「戦争」という部分に論点が集中しています。二応聞いておきたいんですが、戦争というのは「ネタ」なんですか？

赤木 ネタではないですね。単純に煽りに使ってるわけではなくて、「不利益分配の平等」ということを考えた果てのことです。い

まの社会というのは、私たちのような不利益を被る者の不幸や犠牲のうえに成り立っています。私にとっていまの社会がそのままで続くということは、不幸な人生がコンクリートのように固まるということでしょうか。戦争だったら危険な前線に出て、同じように死んだとしたって、恩給くらい出るし、少なくとも名誉はあるわけじゃないですか、その死に対する。

雨宮 恩給と名誉、大きいですよ。フリーターや派遣は、現状ではただの不幸な人という側面は確実にあるし。死んでやっ取り戻せる誇りつてありますもんね。私もフリーターで右翼をやつてたときは、二歳、希望は戦争でした。私が右翼に「行けた」のは、自分は生きてても死んでも意味がないし、戦争でしかりセットできないという絶望があったからです。ぶっちゃけ日本の周りの人が皆不幸になって死んでほしいと思つてましたよ。そのときの戦争のイメージは、とんでもない天災みたいな、それとイコールつていうか。

赤木さんの場合、『完全自殺マニュアル』の鶴見済さんが言つてたような、「デカイ発」、一発逆転というニュアンスはありますか。

赤木 そうですね。それもありません。ただ、天災だとしても戦争に出てくる名誉や尊厳はなくなつてくるので、いまの状況で同じように死ぬんだら戦争かな。とはいえ、これを読む人は、こいつは一体何を言ってるんだ？と頭を抱えてしまうかもしれませぬ。たしかに戦争になれば、自分が加害する立場になる。加害に対する罪の意識つて

いのはもちろん無いわけではない。ただ、バブル崩壊から二〇年間、社会から叩かれ続けしてきた立場として、相手のことを考えられる状況ではないというのが正直なところですよ。

左翼が切り捨ててきたもの

——そこで、赤木さんはあえてかもしれませんが、左翼の現状認識の杜撰さというのもフォーカスして、二方、雨宮さんは連帯を呼びかけていますが、その辺については？

雨宮 いろいろ複雑な思いはあるのですが、私自身、同世代や当事者としてか連帯できないんじゃないかという気持ちをとどこかで否定できません。年長の左翼の人なんかは、私が去年のメーデーに行つて、プレカリアート（註3）のことを言うようになって、返つてくる言葉が安部が言うところの「再チャレンジ」とかと同じなんです。友達がいるじゃないか、働かなくても月一〇万でも楽しく生きていけるじゃないか等々。なんか、貧乏人は貧乏人でやつていけてな感じで、すこい切り捨ててるんですよ。金のことなんかガタガタ言わずにもっと大義を語れ、みたいな。生活のことで騒いでいる若いやつは本当にダメだ、みたいな言い方をされたのね。それで、私も左翼が安定労働者の権利を優先して、若い人を見放した、見捨ててきたというのには、かなり憤りはありますね。

赤木 やっぱ権利を「守る」ことを前提に考えているから、口先だけ立派でも何か自分たちが不利益を受け入れるという覚悟とか全然ない。たとえばワークシェアリング（註4）とかベーシックインカム（註5）つていうこ

（註1）講座14「不安社会ニッポン」をどう生きるか

（註2）応答文の筆者は佐高信（経済評論家）、奥原紀晴（赤旗編集局長）、若松孝二（映画監督）、福島みずほ（社会民主党党首）、森達也（映画監督・作家）、鎌田慧（ルポライター）、斎藤貴男（ジャーナリスト）。そのほか、鶴見俊輔、吉本隆明もインタビューで言及している。

（註3）新自由主義経済下の不安定な雇用・労働状況における非正規雇用者および失業者の総称。

（註4）各々の労働時間を短くすることで、その分、従業員を増やす、または、解雇する従業員数を減らし、雇用機会を増やそうとする政策。

（註5）一定額の所得を、すべての個人に無条件に——資力調査も就業条件も課さずに——交付しようとする構想。

とに対しても、左翼の人がワークシェアリングしようって言った場合、自分の仕事を譲るかといつてもたぶん譲らないし、ペーシックインカムのために増税したらどうなんだって話をしても、たぶんそれには応じないと思うんですよ。

雨宮 団塊の人なんかに説教されるわけです。フリーターは企業の奴隷なんだから怒れとか、人がよすぎるんだとか。じゃああなたが雇う側だったらどうするかって。そうしたら、その人すごい困っちゃった。で、10分後くらいに「全員正社員にする」って言ったので、あなたの給料が下がってもいいんですかね？と聞くと、黙り込んで、何も言えなくなってしまう。その人はまだ正直な方かもしれないけど、結局自分が損するのは嫌なんだな、というのはわかりますよ。

労働組合でも年老いた人なんかは、派遣を入れたくないって普通に言っちゃうんですよ。派遣の若い人の権利とか言っても、あいつらダラシナイし、そんな人間の相手してらんないよ、みたいな。組合も上の人がそう言ってしまうので、助けてくれないんですよ。そういう疎外されてきた歴史が10年ありますからね。

赤木 どこで出たんでしょうね、若者やフリーターがいい加減だっていうイメージは。

雨宮 そこなんです……。
赤木 自分はやっぱりバブル期にフリーターが登場した頃、人手不足の中で働いてもらうことを会社の側からお願ひしなくてはいけなかった時代に、その時代のフリーターが

用語だなど。
雨宮 何かおかしな、ワケのわからない生き物だみたいな……。
赤木 ゲームが普及したあとの世代のことを明確に批判してる言葉なんです。そういうことは、いわゆる部落に対する差別用語と意味としてほとんど同じようなことだと思つてます。ちよつと、そういう書き方はないだろうと思ひましたね。

あと、「『何も持つていない』私というが、いのちは持つてるのである」という発言。でも、心臓が動いているだけのものをいのちとか呼ばれても、それはもう慰めにも何にもならない。
雨宮 一方で、戦争とまで書かなくてはならない切実さに寄り添わないだろうというの、この反論を見て思ひましたね。やっぱりそこが断絶なんですよ。

赤木 編集部に冗談で聞いたんですよ、そういう文章を書いてくれるという趣旨でお願いしたんです。でも、さすがにそれはないと。自分の文章を普通に読んで感想を書いてくれとお願ひしたら、総じてああいう文章があがつてきたっていう……。

雨宮 戦争に行くのは赤木さんみたいな人だよとかいっても、やっぱり何の説得力もないですからね。
赤木 いや、戦争行つてもいいよ、という反論しか自分としては返せない。

雨宮 でも、こういうことを明確に言う人が現れたというのは、すごく面白いですよ。多くの若者が自分の奥にある気持ち



たぶんチャランポランだったんだと思うんですよ。それが尾を引いてる気がするし、多くの人がそういう冷やかな目でフリーターを見てますよね。自分の好きなときだけ働いてっていう。実際は働きたくても働けない、入れてもらえないのが現状なのに。

雨宮 派遣をやつてる人で、すごく正社員になりたいのに、周囲の認識はどうせ責任を持ちたくないから派遣を続けてるんだろ、と。実際は正社員と同程度の責任を負う場合が少なくないのに、ただ給料だけが凄まじく違う。でもやっぱり気楽でいいからじゃない、あの人は、といった済まされ方が多いですよ。気分の問題ではない、というところをわかつてほしいんだけど、そこがわかつてもらえない。もちろん定数はあえてフリーターやつてる人もいますけど、夢追いながら。でもその後、出口がないですからね、夢あきらめたあとは。死ぬと言つてるような状況で。

語化できないところで北朝鮮や中国をバツシングしてるけど、赤木さんがここまでバツツと言葉にしてくれてすつきりした若い人は多いんじゃないですかね。
赤木 何か論点がすごい変なところにあるというか、戦争に至るといふことを言わないと、たぶん何もスタートしないんじゃないか。

雨宮 赤木さんが言うような認識を私も持つていて、たとえば憲法改悪反対といった大きな問題ばかりに執着する左翼の人たちは少なくないですよ。もちろん重要な問題だろうけれど、それが変わってしまうことで日本がガラガラと崩れていく、と言ふような人とは絶対に共感できなくて、それでも変わらない日常があり、その日常のなかで弱い人たちから見えない穴に落ちていくという感じ。そういう人たちの存在が無視されているということがあつて、労働法制のこともあるんですけど、改憲の話ばかりするというのは、ある意味、問題のす



——お二人はもとは当事者であつたけれども、雨宮さんはいま、オピニオンリーダーとして活躍されている。赤木さんも経済的な実態はともかく、見え方としては……。

雨宮 大ブレイクですよ。
赤木 何とかなるかも知れないという立場にこぎつけたという……。

雨宮 何とかなると思つたら、左傾化しませんか？ 何とかなりそうじゃないですか、これから発言の場が広がっていくかもしれないし。そうして脱フリーターしますよね。で、豊かになつたら、「持たざる者」から「持つ者」になる。そうなつたら、平和を望むんじゃないかな。

赤木 そうですね。やっぱりネオナチにしてすよね。自分としては、意図的に文章上で左翼と距離をおくスタンスを取り続けることはできるだろうけど、心情としては、左寄りになるかもしれない。だけれども、じゃあ、普通の同年代の正社員と比べて、文章書いて食べていくっていうのはどうなのかって考えると、(収入は)まず正社員ほどにはならないと思うんで、その辺で弱者意識は残るのかなという気はしますね。

「大きな論議」が見過しているもの

雨宮 『論座』での応答文で一番腹がたつたものとか、全くわかつてないと思つたものはないですか？

赤木 佐高信さんですね。自分にとつてすごく腹が立つのは「ゲーム感覚」という表現。これは明確に若い世代に対する差別

りかえという感じがしますね。いまここに
ある生活の問題の。私はもつと日常系でいたいというか。
富裕層—安定労働層—貧困労働層

——赤木さんとは別の角度から、雨宮さんはもちろん、「素人の乱」(註6)など、風穴を開ける人たちが出てきている。大きなことだし、救われている人も多しと思ひます。ただ、現実問題として、生活がすぐ変わるということではない。雨宮さんが最近取り組まれているような、企業の偽装請負(註7)をやめさせたりとか、具体的な運動や権利要求についてはどうお考えですか？

雨宮 いまここにある問題なので。自分がフリーターじゃなくても、弟が過労死しちゃうとなつたり、もう一人の弟が医療難民になつたりとか、じつさい私の周りの人はフリーターばかりだし、そうなる、そういうところを二つや三つやっていくしかないというか、それはほんとにやらなきゃ生きられないんですよ。建築現場に駆り出された派遣社員の人が狭い踏み台から転落して死んでしまつたりとか、リアルな問題として二部の人たちの命だけが軽くなつてくる。周りの人が実際に死に接しているの、どうしてもそれを言わなきゃという。だから、やんなきゃ生きていけないからというところなんです。大きなストーリー、大きな運動をやつていける人たちは、そういう戦場には生きていけないので、憲法の問題とかを必死に考えられるのかな。そういう人も重要なんですけど、向いてる方向が違うと

雨宮処凜 『生きさせろ!—難民化する若者たち』

——ワーキングプアたちの反乱! フリーター、パート、派遣、請負……不安定化する若者たちの労働現場。そのナマの姿を、自身も長年フリーターとしてサヴァイブしてきた著者が取材した渾身のルポタージュ。自己責任のもとに私たちを使い捨てる社会に、企業に、反撃を開始する! この国の生きづらさの根源を「働くこと」から解きあかさす宣言書。『闘いのテーマは、ただたんに「生存」である。生きさせろ、ということである。生きていけるだけの金をよこせ。メシを食わせろ。人を馬鹿にした働かせ方をするな。俺は人間だ。スローガンはたったこれだけだ。生存権を21世紀になってから求めなくてはいけないなんてあまりにも絶望的だが、だからこそ、この闘いは可能性に満ちている。『生きさせろ!』という言葉ほどに強い言葉を、私はほかに知らないからだ。



(註6) 経済至上主義的な社会的価値観に「貧乏くささ」で勝負する「貧乏人大反乱集団」の面々が率いる、東京・高円寺にあるインターネットラジオ、リサイクルショップ、古着屋、呑み屋、カフェ、きまぐれ定食屋の名称。
(註7) 契約上では請負(外部委託)という形を取っているが、実態は受入会社が労働者に直接業務命令をする人材派遣に該当するもの。正規の人材派遣の場合、受入会社と派遣された労働者の間には労働基準法が適用される部分があるので、それを逃れるために契約を請負としている場合が多い。

赤木智弘 『丸山眞男』をひっぱたきたい —31歳フリーター。希望は、戦争。』(論座07年1月号)

——平和な社会を目指すという、一見きわめて穏当で良識的なスローガンは、その実、社会の至みをポストバブル世代に押しつけ、経済成長世代にのみ都合のいい社会の達成を目指しているように思えてならない。このようなどうしようもない不平等感が鬱積した結果、ポストバブル世代の弱者、若者たちが向かう先のひとつが、「右傾化」であると見ている。(右傾化する若者が) 不満や被害者意識を持っているというなら、なぜ左傾勢力は彼らに手を差し伸べないのか。私のような経済弱者は、窮状から脱し、社会的な地位を得て、家族を養い、一人前の人間としての尊厳を得られる可能性のある社会を求めているのだ。それはとても現実的な、そして人間として当然の欲求だろう。



どうか、動機も違いますしね、運動みたいなことを考える上での。

でも、ホワイトカラー・エグゼンプション(註8)のときは、皆が怒りましたよね。目先のカネのことで、困っている人が多いというのは事実ですよ。

赤木 ホワイトカラー・エグゼンプションについては、経済財政諮問会議議員の八代尚宏さんが正社員の給料を引き下げるときに「言ったんだけど、自分は比較的その考え方に賛成なんですよ。最初に言った不利益配分の問題として、既得権益層にどんどん手を入れていく。現在の格差問題は、富裕層と労働者層の対立といった問題ではなく、「富裕層」と「安定した労働者層」と「不安定な貧困層」の三分に分かれる経済問題だと考えています。だから自分としては、普通に生活している人(安定労働層)と、貧困労働層である自分たちの離反の方が何か大きいような気がするんですよ。

雨宮 小泉がいう、郵政選挙のあの掛け声というのは……。

赤木 あれで自民党が「改革」で、野党が「保守」という形に変わった、というのは、大きいと思います。自分のような立場からみて、公務員である人たちが公務員でなくなる、権利を奪われるというのはある種の公正だと。そういうのはあったんで。

雨宮 そういう爽快感は非常にわかります。ただ、結局自民党をぶっ壊すといつて、若い人の生活が破壊されたということに関してはどう思いますか？

者を救う、みたいなことを誰かが言いそうに嫌なんですよ。

雨宮 そうそう。だから、ブレカリアートの突破口は「素人の乱」だよって言われちゃうと、それは月収二四万で楽しく生きていけという話になって、すごいキツイ縛りですからね。もっと高い収入を望む自由もあるし、孤独に生きる自由もあるし、集まらない自由もありますしね。ただ彼らは自然にやっているから、そこが素晴らしいなと思いますけどね。

赤木 そう、いいですよ。

——もう一度話を整理すると、いまの社会の流れを放置すると、階層がより固定化される可能性があると思います。左翼ハッシングはわかるんですが、そうしたことは前提として、現実的に動けばいいのという人が僕の周りにもいるんですよ。こだわらなくて申し訳ないのですが、その点はどう思いますか？

「右傾化した若者」の行き先

赤木 そこに対して、理不尽さを感じますよね。なんで自分たちが闘わなきゃいけないんだと。この現状を作ったのは、その現状ができる前にいた人じゃないかと。バブル崩壊前の社会を生きてきた人たちがじゃないかと。その人々が責任をとらない限りにおいて、自分は闘いたくないんですよ。やっぱ。そういうことで闘えと言われても。やらざるを得ない状況にはもちろん立たされるかもしれないけど、やらざるを得ない状況になったら合わないんだらうけど、だけれども、もうなんか闘いたくない。彼らの尖兵として闘わされるのは嫌



赤木 そうですね、小泉が自民党をぶっ壊すといつて、そこから壊れたのではなくて、パブル以降の方向として、派遣法の改正などがあつて、そういう流れのなかで小泉が言ったに過ぎないと思うんで、小泉が何かを変えたとは思いません。あくまでパブル中盤からの流れのなかでいまの現状があると思います。別にあれば、小泉だろうが誰だろうが同じことになったと思います。

雨宮 そうですね、誰でも変わらないうですね。

赤木 少なくともずっと卒業と就職というのは近接していて、自分たちの時にはパブルはとくに崩壊していた。そういうなかに我々の現状があるとすれば、小泉は何も変えなかった。ただ明確に改革と保守というのを転換させたというのが彼の功績だと思うんですよ。功績というかごまかしというか……。

だと。それだったら、戦争の前線に立つた方がまだマシだつていう。なんか、そういう感じですね。たぶん、彼らが反省を示してくれば、同調して、一緒にやれるような気はしますけれども。まあ、また考えられる立場じゃないですね。

雨宮 経団連の会長よりも左翼に対する被害者意識が強いというのはありますか？

赤木 口では平等とか人権とか言っている人たちが、現実の局面では平等とか人権に対して空しいようなことになっているというのは、すごい変な感じですよ。

雨宮 赤木さんの文章は、鬱積を抱えたフリーターの人たちの心にすごく響くと思います。こういう逆切れの方法があつたか、という。ネット右翼の人も逆に気づくかもしれないとも思うんですよ、これを読むと。自分のもやもやした感情の正体。

——こういうとあれですけど、お一人とも大学を出ていらしゃらない。知識人っていうのは、例外もありますが、高学歴で出自に恵まれた環境の人が多いわけですよ。赤木さんはブログの中で、エリート主義や教養主義について言及されてましたが、その辺りで何か言いたいことはありますか？

赤木 『論座』の月号に、自分がフリーターについてことを出すというところはキツかったですね。

雨宮 あ、そうなんですか。それは理由は？

赤木 周りがどこでか大学というの、いい略歴があるじゃないですか。だから写真出すか出さないかという話よりも、学歴出さないでください。最初は言おうと思いましたが、でも、大学教授をやつてるような人のすごい

「素人の乱」

——雨宮さんの「生きさせろ！」について、何か違和感を持った部分はありましたか？

赤木 そうですね、違和感はずいぶんあります。当事者が実際に感じたり体験したりしていることが書かれてるので、そこに対して反論を差し挟む余地はないというか。うちもその現実を知ることができて、勉強になったという感想ですね。ただ、『論座』四月号で雨宮さんが書かれた、「素人の乱」的なものに対する見方に少し懸念を持ちました。「素人の乱」自体は否定しないし、彼らがそういう生き方をしたいと望んでいることは構わないんですが、ただ、何か苦しんでいる若い人があのように生きるべきだと思われてしまうとすごく困るなと感じるところはあります。ただ、あの号では自分に対する応答文よりも、「素人の乱」のあり方の方が、自分に対する反論のように感じましたね。

雨宮 かなりコミュニケーション能力の高い人たちですからね、「素人の乱」は。仲間を作れますし、場も持つてるし。

赤木 自分なんかは、他人と二緒に何かしたくないというのではないけれど、まず自分ひとりで生きたいというのがあつて、共同体を持つのがすごい苦痛だと思えます。自分で自立して住居をもつて生活したいというのが、理想の中心にあるんで。彼らのような生き方ももちろん選択肢の一つなんだけれど、なんか、ああいう生き方が若

文章を読むと納得させられるんだけど、何か、イメージというのは伝わってこないというの、ずっと感じてましたね。自分たちの言論と別のところにあるというズレはすごく感じて。

——自分はお二人と同世代ですが、正直、年長世代の人がネットなどで赤木さんの良き理解者のような顔で後から出てくるのを見ると少し複雑な思いもしました。

赤木 あの応答文で自分が一方的に批判を受けたというのは、良かったと思いますよ。明確に出て、断絶が。頭ごなしに反論されて、自分の書いたことは急所に近いところを突いたのかなという気がします。

雨宮 みんな負けてますからね、赤木さんにね。『生きさせろ！』と「希望は、戦争。」って何か同じようなことを言っていると思うので、いいんじゃないですか。赤木さんには「希望は、戦争。」でどどんとチャージしていつてほしいですね。それを読んだ人が問題の所在を感じるだらうし。やつとこへ来てようやく、右傾化の……と言われているものの全体像が漠然と見えてきたと思うので。今後が楽しみです。ね。「右傾化した若者」の怒り、もやもやしたものがどつちに行くのかつていうのが、はい。

(註8) 労働時間という概念をなくし、成果に応じて賃金を支払う仕組み。対象となる社員は、労基法で定められた法定労働時間を超えても、残業代は支払われなくなる。「残業代ゼロ法案」という表現で強い反発を引き起こし、現在、暗礁に乗り上げている。